

断片化した社会化とその理論

加藤 隆雄（武蔵野女子大学）

たとえば『社会化の心理学 ハンドブック 人間形成と社会と文化』（斎藤・菊池，1990）における社会化の領域は次のような項目に分かれている。

第3章	言語的社会化	第15章	成人期社会化の問題
第4章	認知的社会化	第16章	老年期の社会化
第5章	性的社会化	...	
第6章	社会的スキルの習得	第19章	学校での社会化
第7章	道德的社会化	第20章	社会化と地域社会
第8章	政治的社会化	第21章	非行への社会化
第9章	職業的社会化	第22章	拡大する情報環境と社会化
第10章	ライフスタイルと社会化		

ある本では、「盲人」になることが社会化との関連で論じられている。また、調査票に回答を記入する際に、質問項目を読むことで回答者の意識が変化することを「調査票の中での社会化」と言うことがある。ここに挙げられていないが、他にも「経済的社会化」「宗教的社会化」「教師としての社会化」などの用法がある。これは驚くほどのことではないかも知れない。というのも、ゴスリン編の『社会化理論・研究ハンドブック』（Goslin, 1969）においてすでに、同じような社会化領域の多様化が見られるからである。それらは心理学、社会心理学、人類学、教育学などの領域にまたがっている。これは現在の教育社会学における社会化研究の趨勢と大きく違うところはない。

むしろ、逆に伝統的社会学における「社会化」概念の狭量さに驚くべきなのかもしれない。社会学的概念は、まずデュルケムの「方法的社会化(socialisation méthodique)」の説明から始まるであろう。彼のいう方法的社会化は、「全体としての政治社会が、また子どもがとくに予定されている特殊の環境が要求する一定の肉体的、知的および道德的状态を子どもの中に発現させ、発達させる」（デュルケム，1976）ものとして考えられており、その具体的内容とは「宗教的信仰、道德的信念および慣行、国民的もしくは職業的伝統、あらゆる種類の集合的意見」（同上）とされていた。社会化の作用は、「個人的存在」を「社会的存在」

に結びつけるものであった。社会化は「全体」社会の、「政治社会」の、「集合的意見」や「国民的伝統」としての「道德的信念」「宗教的信仰」を、新たな社会成員である子どもに内在化させることなのであった。

しかし、デュルケムの社会化概念に改めて驚く人はいないだろうし、また「社会化」の現在の用法も別段不審はもたれないだろう。ところが、この両者を比較してみると、その間には絶望的なほどの乖離が存在している。社会化の概念は、その出自である理論をもう失っているのである。

これは、一世紀の間に社会化概念が拡張し進展していった結果であると考えべきなのかも知れない。社会化研究が「二次的社会化」の概念とともにいくつかの領域に拡大して、研究が細分化していった結果とみるべきなのかも知れない。デュルケムの生きた市民社会の危機の時代が変化したともいえるだろう。現在の用法では、社会化は、「教育」に対立する「中立的な」言葉であって——というのは、教育言説のもつイデオロギー作用が存続していたつい最近までは、社会化概念は教育の隠れた作用を暴く概念装置でありえたからなのだが——、個人の外部に由来する影響や圧力を、個人の意識の回路を直接経由しないかたちで受け入れる過程のことを指すようになっていく。

両者の差異は、少なくとも次のようにまとめることができるだろう。デュルケムの社会化観は、統合的・求心的であったのに対して、現代日本社会における社会化の用法は、拡散的で細分化され中心がなく断片的なものである。先のハンドブックに見られるように、社会化は、子ども期から青年期・成人期だけでなく、老年期にまで用いられるようになり、社会の模範的・典型的成員以外の人々に対しても用いられ、「非行への社会化」という矛盾したような用法まで出現するようになった。いくつもの領域で社会化がありうるということは、デュルケムが考えたように、社会化が人格全体の変質、社会的存在全体への作用であることをやめたということの意味する。人間は役割の束としてだ

けでなく、役割同士の連絡も欠いて細分化されたまま存在するようになった。理論的には、社会の成員としての社会化された個人は、幾層にもわたって社会化された個人のはずである。けれども、現代の社会化概念の用法が示唆するのは、社会の共有価値を欠き、各レベルの社会化を統合する中心を欠き、完成した社会化モデルを欠いた個人である。このような社会化はもはや（少なくともデュルケムが考えたような）社会統合の要件ではありえない。社会化は、ゾンビの如く存在しているのである。

現代の青少年における子ども期と青年期と成人期の相互嵌入は、このような事態の徴候である。そこで、「社会化寡少」「社会化過多」の概念が必要になった（加藤, 1995a）。「大人」の世界が諸メディアを通じて子どもの世界に侵入する。子どもは、醒めたものの見方のように、成人の生活経験が生み出し、実際に生活と機能的に結びついた感情・価値・行動様式などを、実生活の裏づけのないまま、表層的な表象・シンボルとして取り入れる。表層的に社会化が行われる。それは同時に、社会に対する武装でもあり、内側にある子ども世界の《城》にとっての防御壁となるために、社会化は内面では進行しない。現代の社会化の二重構造は、パーソンズ以降の社会化論が社会化の基本的メカニズムとした価値規範の内面化の概念が、実はきわめて社会-歴史的な形成物であったことに気づかせてくれるのである。

パーソンズ社会学の出発点であった「ホッブズ問題」は、共通価値の共有とその制度化によって解決され、社会秩序としてもたらされると考えられた（パーソンズ, 1976）。けれども、パーソンズの社会秩序観は、ゴッフマン（ゴッフマン, 1974; 1980; 1985; Goffman, 1974）とガーフィンケル（Garfinkel, 1967）において、暫定的で一時的で断片化され細分化された社会秩序観へと変貌したのである（加藤, 1995b）。このような細分化された社会秩序の観念は、ベンヤミンが破砕化された全体性を見（ベンヤミン, 1979）、アドルノが断片化されていくプロセスと虚偽としての全体性を管理社会の名でとらえ（アドルノ, 1971）、リオタールが失墜したメタ物語の代わりに出現した細分化された物語を言語ゲームのモデルによって捉え（リオタ

ール, 1986）、ジェイムソンが分裂病に譬えた（ジェイムソン, 1987）ポストモダン社会、あるいは近代社会のポストモダンの徴候の、社会学理論平面上での表現であったとみることができる。そして、現代の社会化の断片化された形態は、そうした社会の忠実な反映であり、そうした社会理論の証左である。

社会秩序の機能要件として指定された社会化の理論は、一方では社会秩序理論（ミクロ社会学）と社会理論（批判理論）の、他方では社会化の現状（社会化ポストモダン）の両面攻撃において瀕死の状態にある。しかし、社会化の領域研究は生き続け、社会化という言葉は理論基盤を失ったまま用いられている。概念が正確さを欠いたまま汎用されるようになった結果、その概念が理論的な力を失っていき鈍磨していくという現象は、少なくとも教育社会学というディシプリンではよく起こることであるのだが、この場合、教育社会学者の機能とは、そのような事態を隠蔽しながら、つまり全体性という幻想を保存しながら、その実は細分化を推し進めて行くイデオロギー担当者の役割なのである。現在、社会化に代わる批判的概念が必要とされているのではないだろうか？

【文献】

- アドルノ, Th. W. (1971) 大久保健治訳『批判的モデル集II 見出し語』法政大学出版局。
- ベンヤミン, W. (1979) 山本雅昭・幅健志訳『一方通行路』晶文社。
- デュルケム, E. (1976) 佐々木交賢訳『教育と社会学』誠信書房。
- Garfinkel, H. (1967) *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall.
- ゴッフマン, E. (1974) 石黒毅訳『行為と演技 日常生活における自己呈示』誠信書房。
- ゴッフマン, E. (1980) 丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造 新しい日常行為論を求めて』誠信書房。
- ゴッフマン, E. (1985) 佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い 相互行為の社会学』誠信書房。
- Goffman, Erving (1974) *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Northeastern University Press.
- Goslin, ed. (1969) *The Handbook of Socialization Theory and Research*, Rand McNally.
- ジェイムソン, F. (1987) 室井尚・吉岡洋訳『ポストモダニズムと消費社会』ハル・フォスター編『反美学 ポストモダンの諸相』勁草書房。
- 加藤隆雄 (1995a) 「社会化ポストモダンの曠野より」門脇厚司・宮台真司編『「異界」を生きる少年・少女』東洋館出版社（印刷中）。
- 加藤隆雄 (1995b) 「断片的な社会秩序とその理論」『Sociology Today』お茶の水社会学研究会（印刷中）。
- リオタール, J.-F. (1986) 小林康夫訳『ポストモダンの条件』書肆風の薔薇。
- パーソンズ, T. (1976) 稲上毅・厚東洋輔訳『社会的行為の構造 1』木鐸社。
- 斎藤耕二・菊池章夫編著 (1990) 『社会化の心理学 ハンドブック 人間形成と社会と文化』川島書店。